

『「前衛」写真の精神：なんでもないものの変容』展

関連ボランティア企画



「前衛」写真の精神って？

1章 1930 - 1940年代 瀧口修造と阿部展也

瀧口修造 写真との出会い

—瀧口修造と二人の女性

今とは違い [1ドル360円]で、インターネットもFAXもない時代、多くの日本人にとって外国は今より遠かった。富山県美術館蔵《瀧口修造夫妻、書齋にて》の前に立ち、あの時の夫の海外渡航を許し、「模倣千円札裁判」で赤瀬川原平と日本の前衛芸術を守りぬいた夫を支え続けた夫人が、時を超えて、「前衛写真の精神:なんでもないものの変容」展を見守っているかのように！

以前、千葉市美術館で開催された「マルセル・デュシャンと瀧口修造展」で、デュシャン未亡人から瀧口修造宛の手紙をガラスケースごしに読み、「終わりは始まり」と涙した事があった。デュシャンを訪ねた時、留守で瀧口はデュシャンに会えずに帰国。その後文通で交流。完成作品を瀧口がデュシャンに郵送。その返事は、デュシャン未亡人からだった。「残念ながら、あなたのこの作品を見る事なく、夫は他界しました。」その後、デュシャン未亡人は、瀧口に、夫の資料を惜しみなく提供。

日本の前衛芸術を思う時、この二人の女性に感謝したい。(M.S)



📷 「フォトタイムス」における阿部展也の写真表現

一意志持つ目

「目は目それ自身の意志を持っているようだ」と阿部芳文（展也）は記している。

1924年創刊の雑誌「フォトタイムス」は、最新の欧米の写真動向を紹介し、日本の写真に大きな影響を与えたことで知られる。阿部は1938年5月から1940年9月まで、表紙と本編に49本の写真掲載と寄稿、誌上座談会へ参加し自らの写真論を展開している。

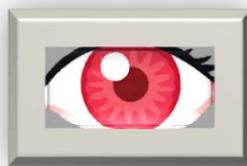
39年4月号掲載の「夜の目」は「街角で自分の目に出会ふといふ言葉は奇妙な錯覚であらふか。」自ら体感したものと「日常の中での発見」とを重ねて述べている。

眼鏡店の看板だろうか。確かに閉じることなく見開き続けている夜の目は、それ自体が独立した意思を持つ不思議な生き物のような気がする。

この目を見ていると38年春開催の第八回独立美術協会展で独立賞を受賞した鬚光の代表作「眼のある風景」を連想する。

阿部がこの作品を見て何らかの影響を受けたかは不明であるが、鬚光も瀧口の企画した「海外超現実作品展」や「みずゑ」で紹介された「マックス・エルンスト」などシュルレアリスムの解釈はともかく、海外の作家からの影響を受けているとされている。

各々の影響関係は別として、アーティストにとってまたヒトにとって目とは何であろうか、何を象徴しているのだろうか。考えれば実に不可思議な肉体の一部を我々は有している。(S.N)



2章 1950—1970年代 大辻清司 前衛写真の復活と転調

📷 私（わたくし）の解体—なんでもない写真 大辻清司実験室 #11 住まいができれば

—誰もが経験することではないけれど

オブジェを被写体に前衛写真を追いつけて来た大辻清司が、自分の住まいの変遷を撮った作品。写真雑誌アサヒカメラに「大辻清司実験室」のタイトルで載せている。築80年と思われる木造家屋に18年住み続け、これ以上は無理と判断して建て直す経緯をカメラに収めた。代々木上原にあった古い住宅が解体されていくようにシャッターを切る。

自分とは関係性が低いオブジェ撮影に比べ、長年住まいとしてきた場所を被写体とするのはどんな気持ちだったのだろう。そして翌年、古い住まいは篠原一男設計のモダンなコンクリートむき出しの住宅へと姿を変えた。大辻は、着々と工事が進むようすや、完成後、居間でお祝いをしているようすも写真にしている。解体写真の淡々とした雰囲気とは違い、こちらは明るい笑い声が聞こえてきそうだ。

解体される古い家にも、モダンな新しい家にも、背景に生活臭の残る家具雑貨類が写りこんでいるのが見ていて楽しい。(S.A)

3章 1960 - 1980 年代 牛腸茂雄 前衛写真のゆくえ

📷 日常を撮ること

— 目のひかりに囚われて

写真の中からじっと見つめ返している目。カメラを構える写真家に向けられている眼差しだが、写真家を通り越して私に向かってきている。公園の中にうずくまる子。

兄と弟の写真では兄の目が話しかけて来る。どれもが昭和の写真で、被写体となっている子供達は、無事大人になっているだろう。大人になった目を見たとき、今でもこの写真の中にいる様な子供達は見つけれられるだろう。写真の中の子供の時間は一瞬だが、続いている命の中の一瞬。

桑沢デザイン研究所からの友人三浦和人に 「20歳まで生きられるかを危ぶまれていたけどクリアしたよ。」とか、「早く30 になりたい。30 になれば発言の重さが今とは格段に違って来るから。」と話している。他者の視線と命の重みを胸の内に抱え続けていたのだと思う。(S.U)



📷 『SELF AND OTHERS』 3 (双子の女の子) 前期展示

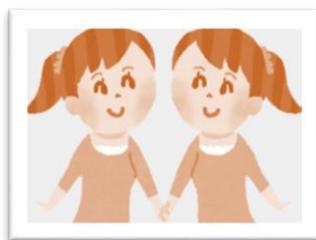
— 『前衛』は変容する、

双子の女の子を写した、どこかで見たことのあるこの作品。自己と他者、似ているようで違う二人、見ているとこちらが見つめられている感覚にも陥る。

胸椎カリエスを患い背骨の変形、低身長というハンデから、人に見られる自覚のあった牛腸ならでの、被写体との距離感だろうか。

『一瞬のきらめきを記録するスナップショットに魅力を感じ始めている』とも牛腸は言っていた。

難しいことはさておき、スマホで日常を写せる現在、この感覚は 私たちも体験できるかもしれない。(S.H)



📷 『SELF AND OTHERS』

—他者に映る自己

新しい命の誕生から始まるこの作品集の人々は、多くが真っ直ぐにレンズを見つめている。その目は家族写真のように穏やかで、静かだ。牛腸は「他者」の姿を、その繊細な感覚を生かし大切に残そうとした。「他者」に映る自身の生。写真集トップの新生児を捉えた一枚に、彼はこんな製版指示を出している。「やわらかな光。新生児誕生の瞬間です。」淡い光に包まれた、目の前に迸る生命のエネルギー。限られた命の時間を常に意識していたといわれる牛腸は、カメラを向ける人々の生をどんな思いで見つめていたのだろうか。

師であった大辻清司は、彼の被写体への思いを「牛腸の像が重なり合った願望の自画像」と想像した。なんでもない日常は、カメラで切り取ると特別な一瞬となる。牛腸が「日常」に拘り続けた意味を想像してみよう。

大辻が、牛腸に体力を要す写真家への道を勧めたことを、後に「自分の不明を恥じた」と綴った。しかし、牛腸にとって写真とは自分を表現できる最適な手段だったのではないか。まるで水を得た魚のように表現に没頭していた牛腸の姿を、作品から感じ取ることができるはずだ。「記録する写真」から、「思いを込める」写真へ。私達もまた、彼の捉えた「他者」の何処かに、あの頃の自分を発見できるかもしれない。(Mi.M)



📷 見慣れた街の中で

—それぞれの日常

前作『SELF AND OTHERS』から一転、「動」の世界へ。都会に流れる時間を切り取ったシーンの数々。まるで夕日のような赤が、通奏低音のように風景を彩る。様々なアングルからのショットは自由な躍動感に満ち溢れ、喧噪までもが聞こえてくるようだ。

四十年以上前、確かにそこにあった人々の日常。それらを眺めていると、なぜか切なく、胸が熱くなる。見ている私は知っているからだ。ここに切り取られた時間は、もう戻らないと。しかし写真の中の人々は、そんなことを知る由もない。「日常」が永遠に続くかのように生きている。きっと私達の「今」という時間も、二度と元には戻らない。

病の影を引きずりながらシャッターを切り続けた牛腸は、街ゆく人々の日常の背後にあるものを「人間存在の不可解な影」と表現した。「日常」として捉えられる、あらゆるものが、実は当たり前ではない。そもそも、それらをかたち作る私達人間は、どこからやって来たのか。雑踏の中の人々が、あまりにも自然に、当たり前のように日常を生きていることが、牛腸には、答えの出ない大きな不思議に映ったのかもしれない。そして、それがどんなにかけがえのないものか、人一倍感じていたのではないかと想像してしまう。

命輝く日常、かけがえのない時間。私達もその中に生きていることを、牛腸の作品はさりげなく語りかけてくれる。(Mi.M)

前期展示：4月8日（土）～4月30日（日） 後期展示：5月2日（火）～5月21日（日）